

小 学 校

平成22年度

教育研究員研究報告書

社 会

東京都教育委員会

目 次

I	小学校社会科部研究主題	1
	1 主題設定の理由	1
	2 研究の方法	1
II	第4・5学年分科会	2
	1 主題設定の理由	2
	2 研究の仮説	2
	3 研究構想図	3
	4 研究の内容	3
	5 実践の分析	7
	6 成果と課題	8
III	第6学年分科会	9
	1 主題設定の理由	9
	2 研究の仮説	9
	3 研究構想図	10
	4 研究の内容	11
	5 実践事例	13
	6 成果と課題	16

I 小学校社会科研究主題

社会的事象に対する理解を深め、
よりよい社会の在り方について考えようとする児童を育てる学習指導の工夫

1 主題設定の理由

地球規模での生活環境の変化や環境問題の深刻化など、児童を取り巻く社会の様子は大きく変化している。そこで、これからの時代を担う児童には、社会的事象について正確に理解し、様々な立場に立って学習して獲得した知識や概念を活用して考え、社会の発展や社会が抱える課題に対して関心を高めていく力が求められている。中央教育審議会答申（平成20年1月17日）の中でも「日本人としての自覚をもって国際社会で主体的に生きるとともに、持続可能な社会の実現を目指すなど、公共的な事柄に自ら参画していく資質や能力を育成することを重視する」ことの必要性が述べられている。すなわち、いかに社会が変化しようと、児童自らが問題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断して、行動し、よりよく問題を解決できる資質や能力がより一層求められているのである。

また、社会科教育研究員が各々の学校・学級で平成22年5、6月に実施した実態調査によると、その対象児童770名のうち、約59%の児童が「学習したことを生活の中で生かすことができない」と回答している。このことから、社会科では、児童一人一人が学習して獲得した知識や概念を実生活に生かすために、社会生活が他者との関わりの中で成り立っていることを理解し、社会の一員としての自覚を十分に養うことが重要な使命であると捉えた。

こうしたことから、当社会科教育研究員では、社会構造の急激な変化の中で、これからの時代を担う児童が、様々な社会の課題に対し主体的かつ切実感をもってよりよい社会の在り方について多面的に考えようとする力を育てたいと考え、上記のような研究主題を設定した。

研究主題の「社会的事象に対する理解を深める」とは、まず、児童に社会的事象に関する基礎的・基本的な知識を確実に習得させるとともに、学習したことを的確に記録し、比較・関連、総合しながら再構成し、社会的事象の意味や特色を捉えているものである。

また、「よりよい社会の在り方について考えようとする」とは、児童が社会的事象に関心をもち、切実感をもって関わり、それらの意味や働きを多面的・多角的に考え、公正に判断しようとする姿のことである。

2 研究の方法

当社会科教育研究員は、学習指導要領の内容を考慮して学年ごとの分科会を設定し、研究の仮説を基に検証授業を行った。その中で、児童の変容を分析しながら、目指す児童像に向けて、研究方法を検討・修正する実践的な研究を進めることとした。

Ⅱ 第4・5学年分科会研究主題

「地域社会、国土や産業の様子についての理解を深め

よりよい社会の在り方について考えようとする児童を育てる学習指導の工夫」

1 研究主題設定の理由

「よりよい社会の在り方について考えようとする」児童の姿を、本分科会では次のように捉えた。

第4学年…地域社会についての理解を深め、地域社会の一員としての自覚をもってよりよい社会の在り方について考えようとする児童

第5学年…国土や産業についての理解を深め、環境保全や自然災害の防止の重要性、産業の発展や情報化の進展への関心をもってよりよい社会の在り方について考えようとする児童

本分科会の考える「よりよい社会の在り方について考えようとする」児童の姿とは、社会科学習を通して社会参画へ向けて拙速な行動化を目指しているのではない。地域社会、国土や産業の様子についての理解を前提に、児童が自分を含めた市民にとってよりよい社会の姿について、学習して獲得した知識や概念を活用して考え、社会の発展や社会が抱える課題に対して関心を高めている姿と捉えた。また、身に付けた見方や考え方を基に他の事例について主体的に調べたり学習した事例を比較したりすることで、社会的な見方や考え方を一層深め、生活をする上で大切なことを考えることも「よりよい社会の在り方について考えようとする」姿の一つであると考えた。

しかし、これまでの自分たちの授業を振り返ると、調べたことをまとめる活動や作品作りで学習を終え、地域社会、国土や産業が抱える課題など学習したことを活用してこれからの姿について考えたり、複数の事例を比較して児童の社会的な見方や考え方を一層深めたりするような活動を行うことは少なかった。また、平成22年5月に本分科会が実施した社会科学習に関する実態調査の結果を見ると、「学習したことを生活に生かそうとしている」と回答した児童は半数に満たず、学習した内容に関心を持ち続け、これからの自分の生活に生かしていこうとする児童が多くないことが分かる。本分科会では、これまでの指導の在り方を見直し、第4学年や第5学年の社会科学習の中で、地域社会、国土や産業が抱える課題やこれからの社会の姿について多面的に考え、地域社会、国土や産業のよりよい発展への関心を高め、社会参画の意識を育てるような学習活動を継続して展開していくことが必要であると考えた。

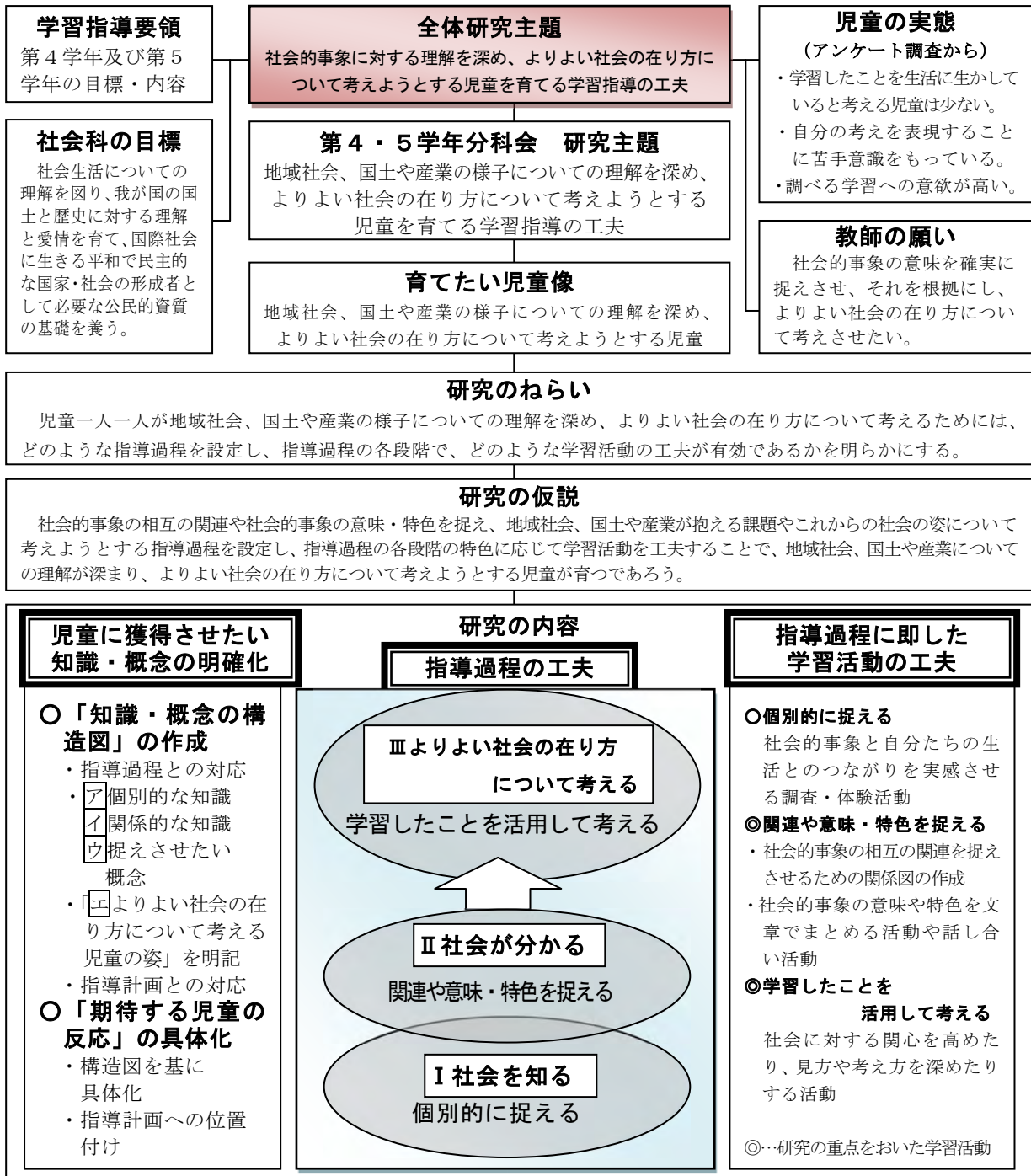
また、「よりよい社会の在り方について考えようとする」ためには、一人一人の児童が社会的事象の相互の関連や社会的事象の意味・特色を捉えていなければならない。そのためには、獲得させたい知識や概念を教師が明確にするとともに、どのような過程と手だてを経ることで、社会的事象の相互の関連や社会的事象の意味・特色を捉え、よりよい社会の在り方について考えようとする児童を育てることができるかを明らかにする必要がある。

そこで、本分科会では、獲得させたい知識や概念の明確化を図るとともに、適切な指導過程を設定し、それぞれの指導過程に即して学習活動を工夫することで、児童は社会生活についての理解を深め、よりよい社会の在り方について考えようとすることができると考え、研究主題を設定した。

2 研究の仮説

社会的事象の相互の関連や社会的事象の意味・特色を捉え、地域社会、国土や産業が抱える課題やこれからの社会の姿について考えようとする指導過程を設定し、指導過程の各段階の特色に応じて学習活動を工夫することで、地域社会、国土や産業についての理解が深まり、よりよい社会の在り方について考えようとする児童が育つであろう。

3 研究の構想図



4 研究の内容

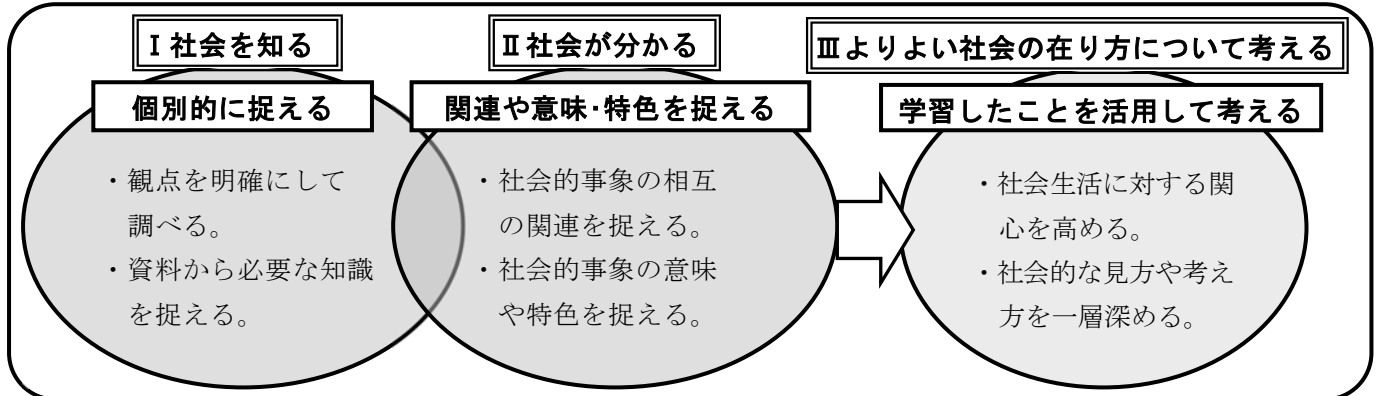
(1) 社会生活についての理解を深め、よりよい社会の在り方について考えようとするための指導過程の工夫

社会生活についての確かな理解が土台になれば、児童がよりよい社会の在り方について考えようとすることはできない。地域社会、国土や産業が抱える課題を多面的に考える際に活用される知識や概念は、単元の学習の中で身に付けられるものであり、一人一人の児童が問題解決的な学習の中で主体的に獲得していくことで、問題に対処するための真の判断力や態度が育っていくと考える。

社会生活についての理解とは、単語や用語などを覚えることにとどまるものではなく、社会的事象の相互の関連や、社会的事象の意味や特色を理解させることである。児童が社会生

活についての理解を深めるためには、教師がどのような過程を経て児童の理解が深まっていくのかを把握し、各段階で適切な手だてを講じる必要があると考えた。そこで本研究では、指導する立場から学習過程を分析し、指導過程を【Ⅰ社会を知る（個別的に捉える）、Ⅱ社会が分かる（関連や意味・特色を捉える）、Ⅲよりよい社会の在り方について考える（学習したことを活用して考える）】と設定し研究を進めた。

社会生活についての理解を深め、よりよい社会の在り方について考えようとするための指導過程



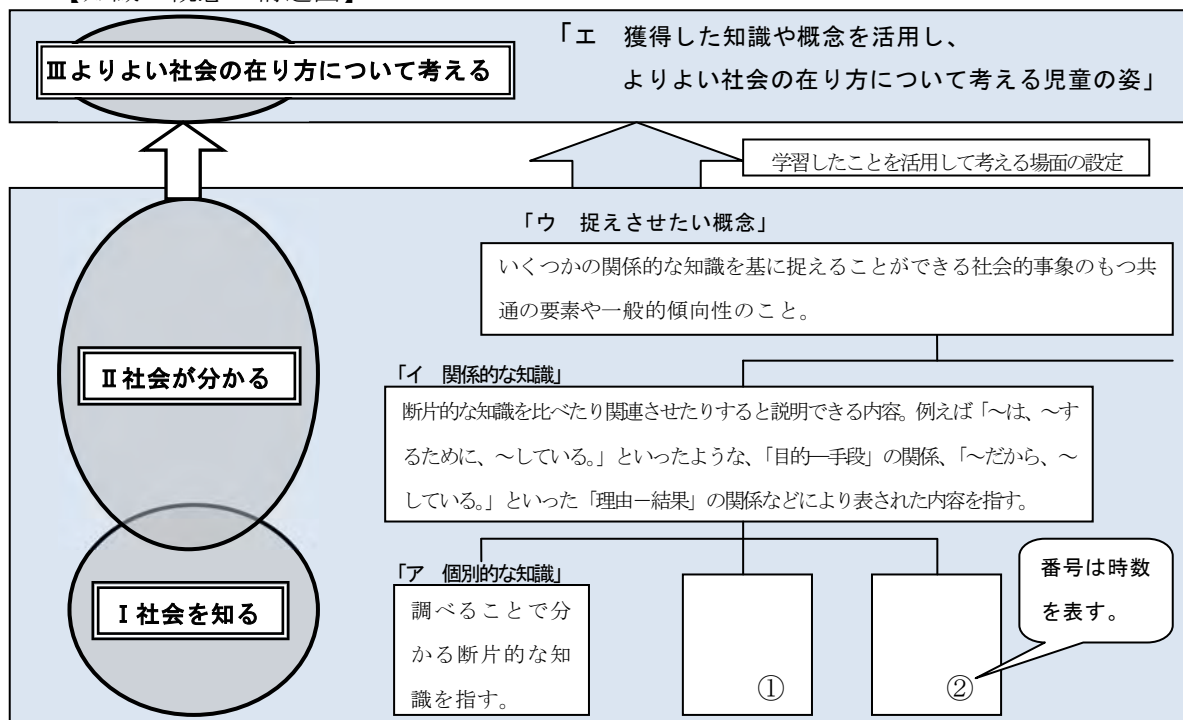
(2) 児童に獲得させたい知識・概念の明確化…「知識・概念の構造図」の作成

上記の指導過程の各段階で獲得させたい知識や概念を單元ごとに具体化することで、教師は児童の理解の深まりや、よりよい社会の在り方について考えようとする姿をイメージすることができる。

そこで、学習指導要領の目標及び内容や使用する教材を分析し、理解させたい社会的事象や社会的事象の相互の関連、意味や特色を明確にした以下の「知識・概念の構造図」を作成した。構造図の項目は上記の指導過程と対応しており、指導計画の各時間でどのような知識や概念を確実に獲得させるのかを明確にしている。また、構造図を基に「期待する児童の反応」を具体化し、指導計画に位置付けた。

構造図の上部には、獲得した知識や概念を活用して考えている「よりよい社会の在り方について考える児童の姿」を單元ごとに明記した。

【知識・概念の構造図】



(3) 指導過程に即した学習活動の工夫

指導過程の各段階における学習活動のねらいを以下のように設定し、学習活動を工夫した。社会生活についての理解を深め、よりよい社会の在り方について考えようとする児童を育てるためには、この中の一つの段階だけを工夫するのではなく、全ての段階でねらいに応じた学習活動を工夫することが有効であると考えた。とりわけ、本研究では、特に「関連や意味・特色を捉える」と「学習したことを活用して考える」段階の学習活動の工夫に重点を置いて実践を行った。

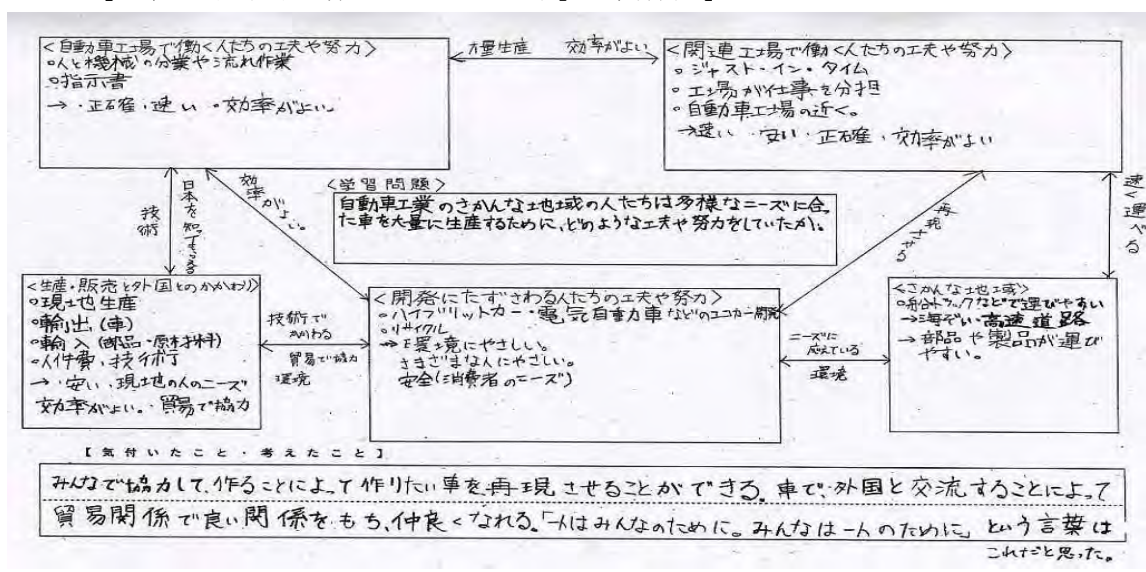
指導過程		構造図との関連	学習活動の例	活動のねらい
I 社会を知る	個別に捉える	A 個別的な知識	・単元の導入における調査・体験活動 【5年「これからの食料生産」：給食を活用した調査活動】 【5年「自動車工業の盛んな豊田市」：注文票作り】	社会的事象と自分たちの生活とのつながりを実感させ、児童の関心を高める。
II 社会が分かる	関連や意味・特色を捉える	I 関係的な知識 ウ 捉えさせたい概念	・単元の内容に合わせた関係図の作成 ※下記参照 ・作成した関係図を基に意味や特色を文章でまとめる活動 ・話し合い活動	・社会的事象の相互の関連を捉えさせる。 ・社会的事象の意味や特色を確実に捉えさせる。
III よりよい社会の在り方について考える	学習したことを活用して考える	E 獲得した知識や概念を活用して考える	・考えたことをゲストティーチャーに価値付けてもらう活動 ・新たに提示された資料を基に自分の考えをまとめる活動 ・調べた事例を比較し共通点を見つける活動 ※下図参照	社会の発展や社会が抱える課題に対して関心を高めたり、社会的な見方や考え方を一層深めたりする。

① 「関連や意味・特色を捉える」段階の学習活動の工夫

よりよい社会の在り方について考えるためには、社会生活についての理解が必要である。社会生活についての理解とは、学習指導要領解説社会編に、「人々が相互に様々な関わりをもちながら生活を営んでいることを理解する…(中略)」とある。つまり、人々の生活は様々な社会的事象が相互に関わり合っ成り立っていることを理解させることが重要となる。本研究では、各単元で関係図を作成する活動を取り入れ、社会的事象の相互の関連を整理し、児童が社会的事象の意味や特色を確実に捉えることができるようにした。なお、社会的事象の相互の関連については関係図を作成する場面で初めて気付くだけではなく、調べる活動において社会的事象の相互の関連を捉えることもある。

関係図を基に捉える内容…消費者のニーズにあった自動車を速く正確に生産するために自動車工場や関連工場は、相互に協力し合いながら様々な工夫や努力をして、効率よく生産していることを捉えさせる。

【5年：「自動車工業の盛んな豊田市」の関係図】

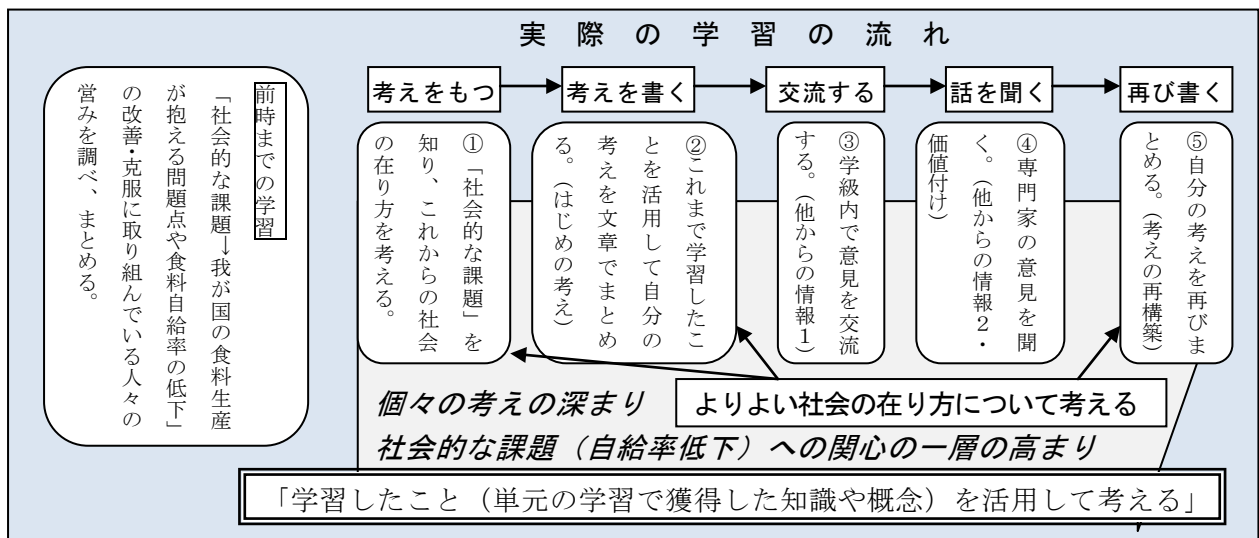


②「学習したことを活用して考える」段階の学習活動の工夫

児童がよりよい社会の在り方について考えようとするためには、単元の終末に学習の中で獲得した知識や概念を活用して考える場面を設定し、単元の内容に応じて考える活動を工夫することが大切であると考えた。そこで、本研究では、各単元の内容に応じて、学習したことを活用して考える活動とねらいを以下のように設定して実践を行った。

単元例と考える活動の工夫	活動のねらい	よりよい社会の在り方について考える姿
<p>【5年：単元「わたしたちの生活と食料生産」】</p> <p>○ゲストティーチャーを活用して学ぶ</p> <p>これからの食料生産の在り方について児童が考えたことを農林水産省の職員に価値付けてもらい、新しい見方・考え方を示してもらおう。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・考えを価値付けてもらい、社会や社会的な課題に対する関心を高める。 ・新しい見方や考え方を知り、自分の考えに取り入れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生産者と販売者の協力の大切さからよりよい社会の在り方について考える。 ・生産者や消費者に対する行政の働きかけの大切さを知り、よりよい社会の在り方について考える。
<p>【5年：単元「工業生産と貿易」】</p> <p>○社会的な課題を提示し、課題を基に社会の在り方について考える</p> <p>新聞記事から貿易問題について知り、貿易サミットを開いて日本の対処方法を考えて話し合い、実際の対応策について知る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・社会が抱える矛盾した課題を資料として提示し、考えを交流することで社会的な課題に対して関心を高めたり、社会的な課題について切実感をもって捉えさせたりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・産業の発展のために様々な研究や開発が行われ、自分の生活に役立っていることを知り、産業の発展のためには、他の国同士お互いを理解し、協力し合っていく必要があることを様々な立場から考える。
<p>【5年：単元「工業生産と貿易」】</p> <p>○別の事例を調べたり、複数の事例を比較したりする</p> <p>自動車工業について学んだことと比較・関連付けながら、鉄工業について調べ、まとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの事例を学習して身に付けた見方や考え方は他の事例にもあてはめて考えることができることに気付かせ、社会的な見方や考え方を一層深める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・鉄工業と自動車工業の比較から、工業生産に従事している人々の工夫や努力の共通点を見だし、日本の工業の特色を考える。
<p>【5年：単元「情報ネットワーク」】</p> <p>○学習したことを基に未来について考える</p> <p>これからの情報ネットワークの在り方や自分たちとの関わりを考える。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでに学習したことを活用して、社会のよりよい姿について考え、社会の様子やこれからの発展に対する関心を高める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・調べて分かったことを根拠に情報ネットワークが進展していく姿や、情報の有効な活用の仕方を考える。

第5学年単元「わたしたちの生活と食料生産」で行った「ゲストティーチャーを活用して学ぶ」を例にして、活動の流れを以下に示す。



5 実践の分析 【5年：単元「わたしたちの生活と食料生産」】

指導過程	活動のねらい	学習活動の工夫	児童の反応	分析	
社会を知る	食料自給率をより身近なものとして捉える。 (第1～3時)	<ul style="list-style-type: none"> 児童にとって身近な給食の材料の食料自給率を調べる。 普段食べている作物ごとの食料自給率を調べ、自分の食生活に当てはめて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 日本の食料自給率はとても低く40%。それだけ自分で作っても売れないのかな。外国産の方が安く、国産は高いのかな。(A児) 予想していたより日本の自給率が低い。国産の物はどうしても少ないのか。(B児) 	給食で示した自給率や1965年との自給率の比較により、40% (カロリーベース) の低さを実感していた。また自給率に問題意識をもち、これまでの学習と結び付けて予想を立てた。	
		<ul style="list-style-type: none"> 45年前と今の食生活を比較し、食料自給率が下がっている原因を考える。 消費者の立場に立ち、買い物場面を想定し、自分の生活と照らし合わせて考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 自給率が下がっているにもかかわらず食べる量が増えている。ということは、日本の自給率を上げない限り、輸入せざるを得ない。働く人は農家が儲からないと分かるとほかの仕事につき、農業の労働者の数が増えていかない。とても悪循環になっていると思う。(A児) 農業や水産業で、若い人が減っていると知ってきたけど、人が少ないと、できる仕事もできなくなるからそれが自給率の低下につながっていると思う。働く人が減ってきたから耕地面積が減って値段が高くなっていると思った。原因はつながっていると思った。日本人が少しでも多く国産のものを食べられるような工夫を考えたい。(B児) 	自給率の低下には様々な原因があることに気付いた。またそれぞれの原因がつながっていることにも気付いていた。問題意識を醸成する時間になった。	
		<ul style="list-style-type: none"> 輸入停止の原因と実際に起こった際の様子を自分の生活に関連させて考える。 自分たちの食事と輸入ができなくなったときの食事のメニューを比べ、輸入にだけに頼ることの問題について自分の考えをもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> 食料自給率が低く、輸入がストップしてしまつたら食生活が大きく変わってしまう。人ごとではないということが分かった。少しでも食料自給率を上げるための努力を自分たちがしなければいけないと思った。(A児) 農業の問題も心配だけど、輸入ができなくなるから、今、輸入している物を大切にしたい。(B児) 	具体的な例示により、食料自給率が低いことの問題点を考えさせることにつながった。食料自給率を上げることの必要性や自給率の低さがどのような問題につながるかについて、切実感をもって考えることができた。	
		問題を見だし、学習問題に対して予想を立て、学習計画を立てる。 (第4時)	<ul style="list-style-type: none"> 普段食べている給食に携わっている栄養教諭から生産地や国産品について話を聞くことにより、食の問題を身近に考える。 身近な取組を知り、学習問題を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> 〇〇市では自給率を上げる取り組みが始まっている。これからもどんどんやっていくといい。(A児) 給食で使っている食材が国産なのは、安全に気を付けているからだと思っていたけど、それ以上に環境にも気を配っていることが分かり、すごいと思った。自分の家でも国産のものをたくさん買いたい。(B児) 	栄養教諭の話聞き、自給率を上げることの大切さを実感できた。また、すでに取組が始まっていることを知り、自分もできるのではないかと見通しをもつことができた。
		調べる視点を明確にし、情報を収集・選択し、読み取る。 (第5・6時)	<ul style="list-style-type: none"> 学習計画で立てた調べる対象を明確にし、それぞれの取組を調べる。 調べたことから、様々な取組が消費者に与える影響について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 国がもっと積極的にやっていけばスーパー、レストラン、生産者がついてくると思う。地道な努力を続けて自給率を上げていかなければいけないと思った。消費者もできるだけ国産を買う方がよいと思う。(A児) 自給率を上げるために国産の物をたくさん売ろうとしている。生産者もおいしくて安全で消費者が喜ぶものを作っている。(B児) 	調べていく中で、それぞれの取組内容と同時に、それぞれのつながりについて考えることができていた。A児は、自分の関わりについても考えている。
社会が分かる	我が国が抱える問題や問題を解決するための取組を理解する。 (第7時)	<ul style="list-style-type: none"> これまで調べ、まとめたことを関係図に整理し、食料自給率を高める取組をしている人たちのつながりを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> 最終的に消費者に全てつながっているということが分かった。自給率を上げるための取組は国が中心となって進められていることが分かった。(A児) 日本の人たちは全員自給率を上げるためにつくしていると思った。頑張っている人全員が協力していると思った。(B児) 	関係図に表すことにより取組のつながりを意識できた。単元全体の意味を捉える学習としての位置付けが弱くなったため、文章でまとめを書き、話し合う時間を確保する必要がある。	
よりよい社会の在り方について考える	これからの食料生産の在り方や自分たちができることについての考えをもつ。 (第8時)	<ul style="list-style-type: none"> これからの食料生産についての考えを農林水産省の人に提案し、価値付けてもらう。 学んだことを基に、これからの食料生産の在り方や自分ができることをまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> 今までの国から消費者という流れを消費者から国へという流れに自分たちが変えていかなければいけないと思った。スーパーへ行ったときには自分で国産を選び、何年後には日本の食料自給率が上昇して欲しい。また、自給率をあげることも大切だけど、安定して食料を得るためには、外国とのよい関係を保っていくことも大切だと思う。(A児) 自分からいろんな人や会社に提案するのがいいと思う。また人が動くのを待ってはいけない。理由は、国が、スーパーがやればいいのかというだけではだめだから。だれかがやるというなら自分がやればいいのかと思う。食料を安定して得るためにできることを考えていきたい。(B児) 	農水省の方に自分たちの考えを価値付けてもらうことで、切実感をもってこれからの食料生産について考えることができた。また、生産者や国の取組だけでなく、自分たちができることがあるなど、関係図に足りない点を指摘してもらったことで、消費者の行動の大切さを実感していた。	

6 成果と課題

(1) 研究の成果

- ア 社会生活についての理解を深め、よりよい**社会の在り方について考えようとするための指導過程**の工夫
- ・指導する教師が児童の理解が深まっていく過程を把握し、「社会を知る」「社会が分かる」過程で適切な手だてを講じたことで、各単元の学習の中で社会的事象の相互の関連、その意味や特色を多くの児童に捉えさせることにつながった。
- イ 児童に獲得させたい知識・概念の明確化…「知識・概念の構造図」の作成
- ・知識や概念を指導計画の中のどの時間で獲得させるのかを明確にしたため、児童の理解の定着を適切に評価し、支援につなげることに有効だった。例えば、関係図を作成する活動の場面では、構造図を基に捉えさせたい社会的事象の相互の関連や、社会的事象の意味や特色を明確にして指導に臨んだことで、関係性が考えられない児童に対し、具体的な支援や助言を行うことができた。
- ウ 指導過程に即した学習活動の工夫
- ・「関連や意味・特色を捉える」段階で、調べてきたことを関係図にまとめ、社会的事象の相互の関連について考える活動を継続して行ってきたことで、「社会的事象は相互に関わりあって成り立っている」という見方をもって調べる活動やまとめる活動を行う児童が増えた。それにより、関係図を作成する活動では、今までの学習で身に付けた見方を生かして社会的事象同士を矢印で結び、矢印の意味を記述する児童が見られるようになった。
 - ・「学習したことを活用して考える」段階で、社会が抱える課題やこれからの社会の姿について考える活動を継続して行ってきたことで、社会の課題やこれからの社会の姿について切実感をもって捉え、関心が高まった児童が増えた。例えば、新聞記事から学習した産業と関連のある記事を探して発表し、意見を交流することが日常的に見られるようになるなど、児童は学習を終えた後も社会の様子や社会の課題に対して関心をもち続けていた。また、複数の事例を比較したり、他の事例を調べたりする活動を行ったことで、単元の学習で身に付けた見方や考え方を他の学習でも当てはめて考えようとする児童が増えた。

(2) 研究の課題

- ・「知識・概念の構造図」に位置付ける「個別的な知識」について、単元で押さえるべき内容を基に精選していく必要がある。精選された「個別的な知識」を基に、使用する教材や資料をさらに吟味していく。
- ・「学習したことを活用して考える」段階では、使用する資料の内容や提示方法、教師の発問、ゲストティーチャーの位置付けにより、児童の反応が異なってくる。本研究で実践した「学習したことを活用して考える」段階の活動の流れを再度検証し、使用する資料の内容や提示方法、教師の発問、ゲストティーチャーの位置付けを整理していきたい。

Ⅲ 第6学年分科会研究主題

「歴史的事象の意味を捉え、

自分なりの見方・考え方を表現する学習指導の工夫」

1 研究主題設定の理由

社会科において「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う」ことを重視した学習指導要領が、来年度から全面実施される。本分科会が平成22年5、6月に行った実態調査（6年生235名）では、社会科の学習が「好き」「どちらかというと好き」と回答した児童は約8割に達している一方で、社会科の学習で考えをまとめたり、まとめたことを発表したりすることが「嫌い」「どちらかというと嫌い」と回答した児童が約4割に達した。本分科会ではこの結果を、児童は歴史学習に対して興味・関心をもって取り組んでいるが、習得した知識を活用して考えたり表現したりすることを苦手としている児童が半数近くいるのではないかと分析した。これは、歴史学習の中で習得した知識を、自分たちの生活に活用できるように考えたことを表現する力が弱いという課題のある児童が半数近くいるとも言い換えることができるであろう。

そこで本分科会では、歴史学習を通して自分なりの見方・考え方を表現できる児童の育成を目指すことでこの課題を解決していきたいと考えた。

また、小学校学習指導要領解説社会編には、「『歴史を学ぶ意味を考えるようにする』とは、単に過去の出来事を理解するだけでなく、現在の自分たちの生活や国家・社会の発展の基盤がどこにあるのかを考えたり、過去の出来事を現在及び将来の発展に生かすことを考えたりすることができるようにすること」と明記されている。この内容を受け本分科会では、歴史学習を通して過去の出来事を現在及び将来の発展に生かそうとする児童を育成することは、学習指導要領に示されている「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う」ことにつながると思え、分科会主題を設定した。

「歴史的事象の意味を捉える」とは、各時期において、学習指導要領で扱う事項を調べ、それらの事項を関連させることで「欧米の文化を取り入れつつ近代化を進めた」のように、その時期のもつ特色を児童が捉えることである。これは全児童が共通して捉えなくてはならない内容である。

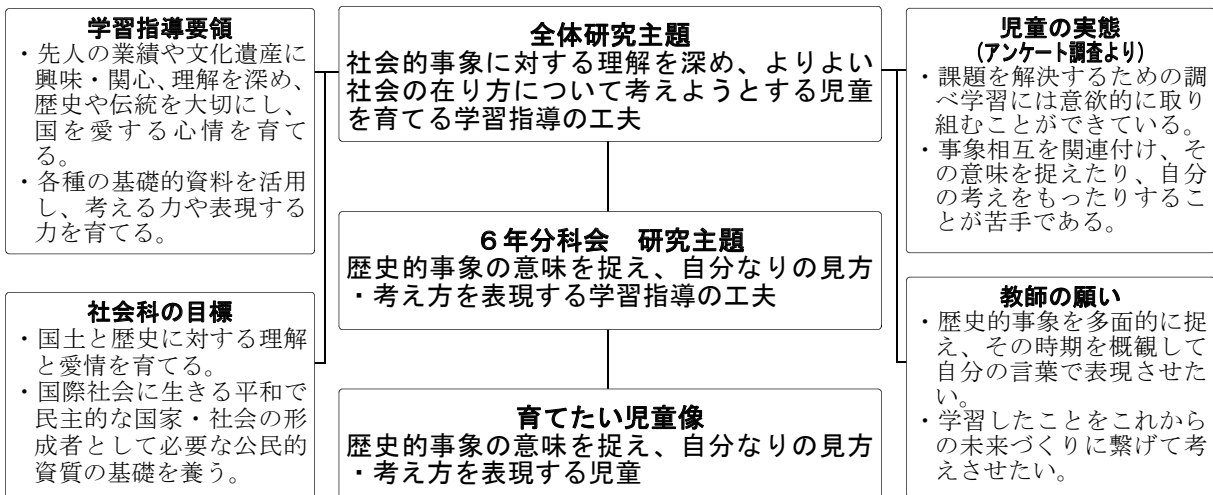
「自分なりの見方・考え方を表現する」とは、歴史的事象の意味を捉えた後に、現在及び将来の発展に生かすという視点から、その時期に対する自分の考えを表現することである。

そこで、歴史的事象の相互の関連を考える学習の際に人物の気持ちに迫らせたり、多面的な立場から捉えられる資料を提示したりするなど、学習指導に工夫を行っていく必要があると考え、研究実践を進めていくこととした。

2 研究の仮説

歴史的事象の意味を捉えさせるための指導過程を明らかにし、指導過程の各段階の特色に応じて児童が多面的な立場から歴史的事象を捉えるとともに、自分なりの見方・考え方を表現するような学習活動を工夫すれば、過去の出来事を現在及び将来の発展に生かそうと考える児童が育つであろう。

3 研究構想図

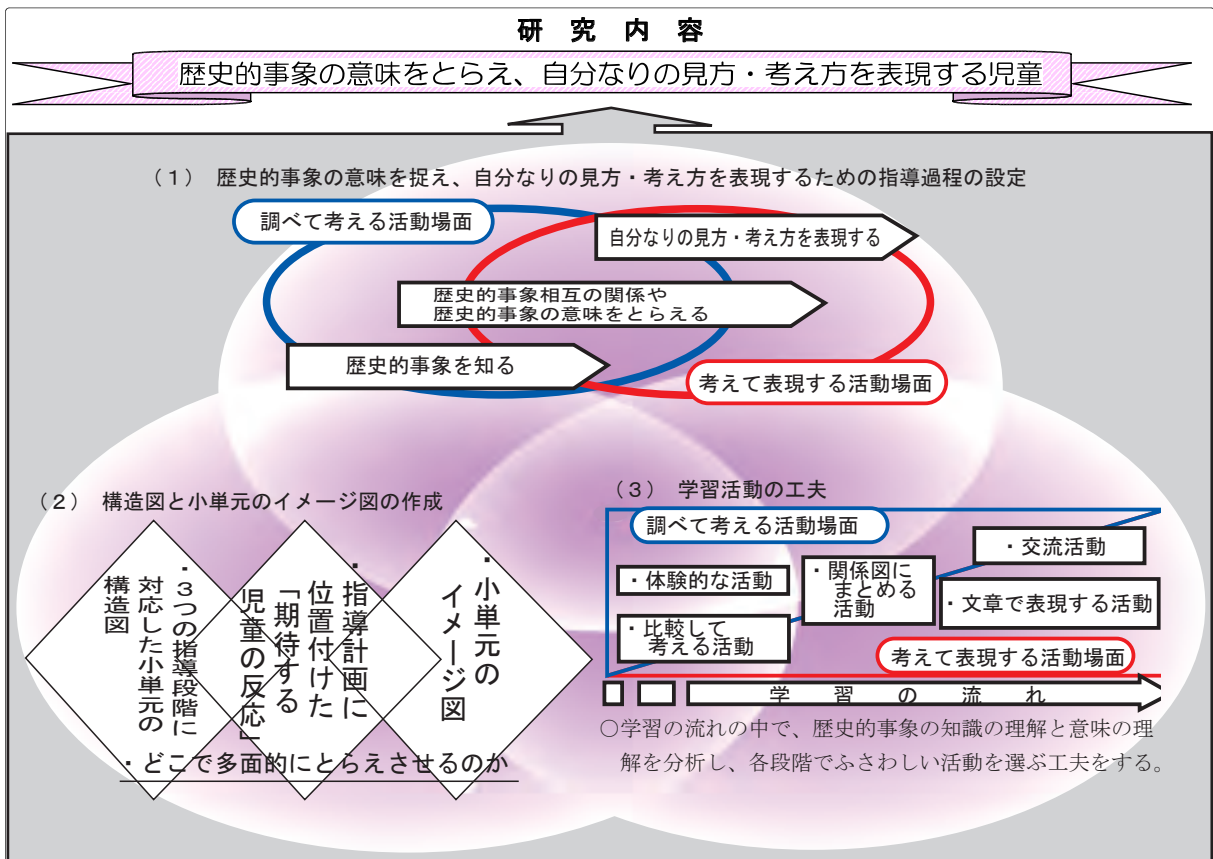


研究のねらい

児童一人一人が歴史的事象の意味を捉え、自分なりの見方・考え方を表現するためには、指導過程における各段階で、どのような学習活動の工夫が有効であるかを明らかにする。

研究の仮説

歴史的事象の意味を捉えさせるための指導過程を明らかにし、指導過程の各段階の特色に応じて児童が多面的な立場から歴史的事象を捉えるとともに、自分なりの見方・考え方を表現するような学習活動を工夫すれば、過去の出来事を現在及び将来の発展に生かそうと考える児童が育つであろう。



4 研究の内容

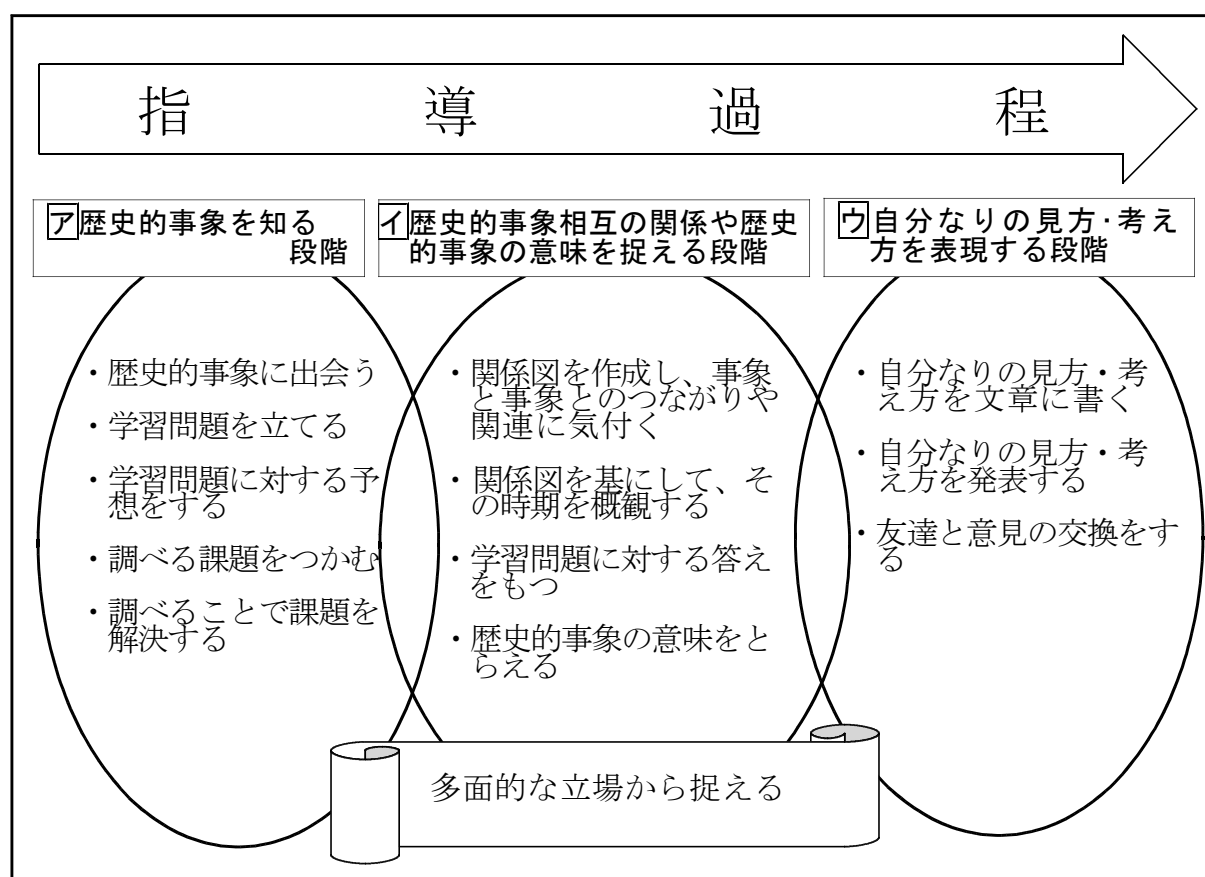
(1) 歴史的事象の意味を捉え、自分なりの見方・考え方を表現するための指導過程の設定

本分科会では、多面的な立場から児童が歴史的事象の意味を捉え、自分なりの見方・考え方をもちつためには、その指導過程を明らかにし、各過程における具体的な学習活動の姿を教師が把握しておくことが重要であると考えた。そこで、

- ア 歴史的事象を知る段階
- イ 歴史的事象相互の関係や事象の意味を捉える段階
- ウ 自分なりの見方・考え方を表現する段階

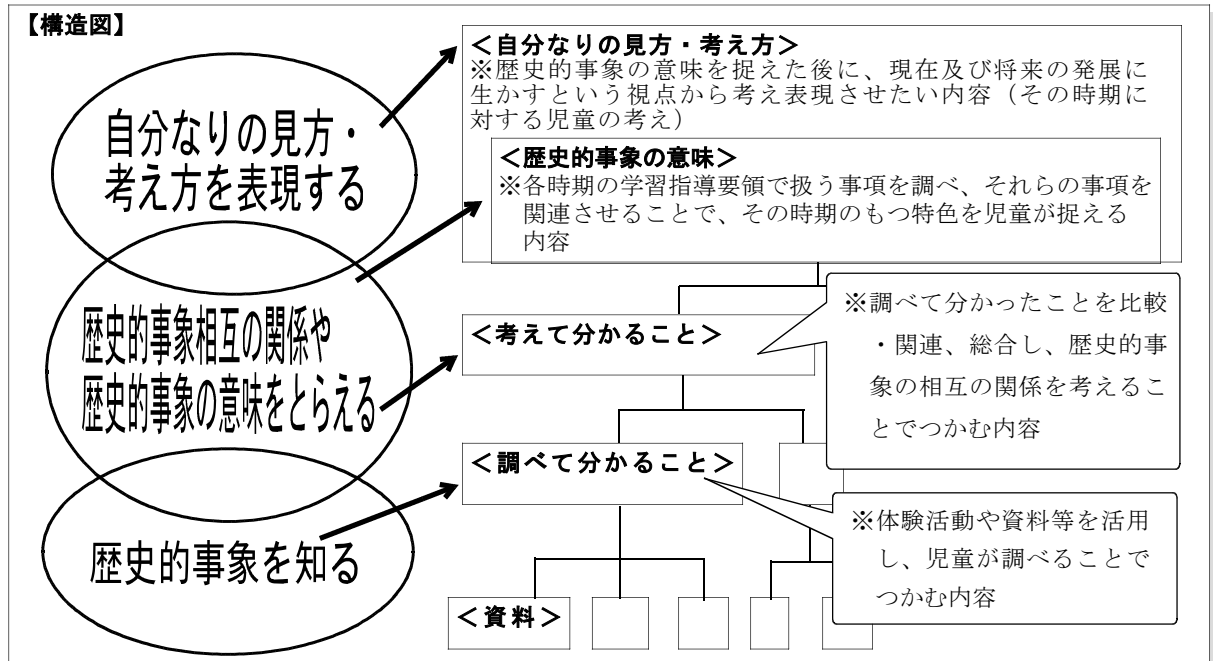
といった指導の細かい段階を設定した。

そして、3つの段階を「調べて考える活動場面」「考えて表現する活動場面」という2つの場面に分け、それぞれの場面において学習活動の工夫を行うことで、歴史的事象に対する自分なりの見方・考え方を表現できる児童の育成を目指した。



(2) 構造図と小単元のイメージ図の作成

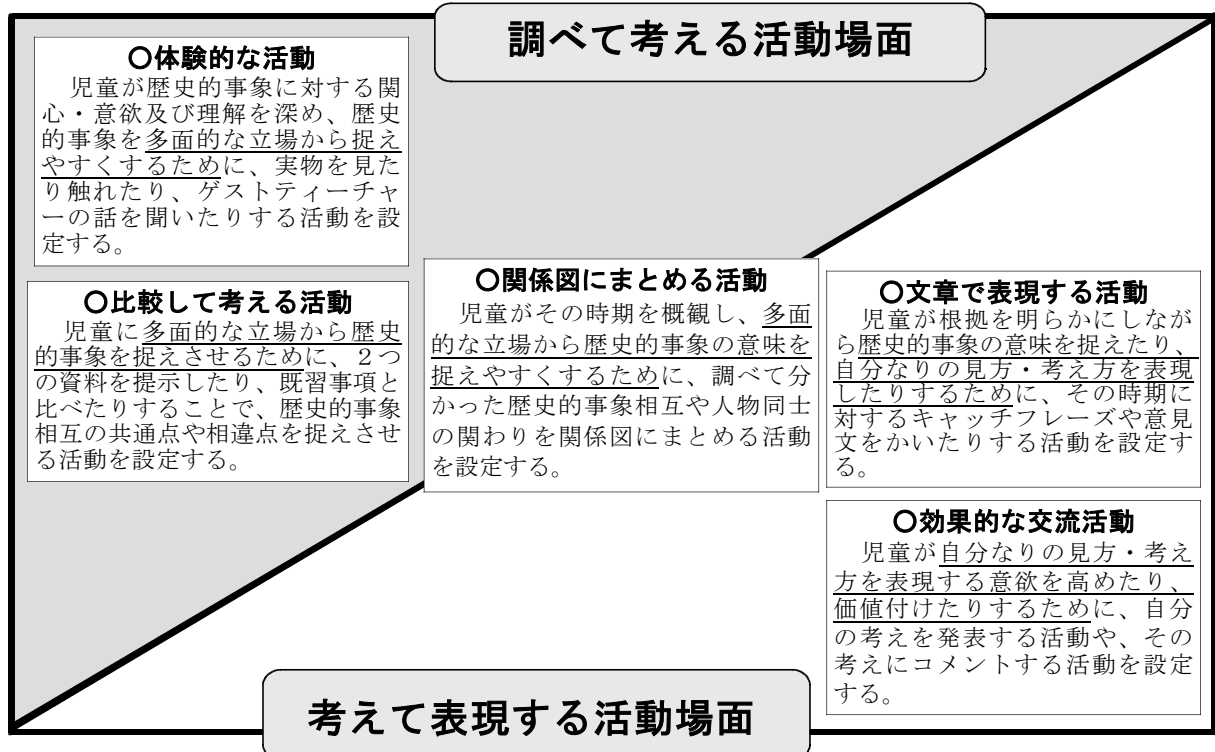
児童に歴史的事象の相互の関係や歴史的事象の意味を捉えさせるためには、教師が各小単元で獲得させる「資料の読み取りから分かる知識」「歴史的事象間の関係」「歴史的事象の意味」を明確にして指導することが不可欠である。そのため、本分科会では3つの指導の段階に対応した構造図を作成し、構造図を基に各指導の段階における「期待する児童の反応」を明確にして、指導計画の中に位置付けた。



そして、現在及び将来の発展に生かすことにつながる「自分なりの見方・考え方」を児童にもたせるためには、上述したアやイの細かい指導の段階において、歴史的事象を多面的な立場から捉えさせることが重要と考えた。そこで、小単元のどこで多面的な立場から捉えさせ、そのためにどのような手だてを講じるかなどを明らかにして指導に当たる指針となる「小単元のイメージ図」を作成した。

(3) 学習活動の工夫

本分科会では、学んだことを根拠にして、各時期の歴史的事象に対する自分なりの見方・考え方を表現するために、上述した2つの場面「調べて考える活動場面」「考えて表現する活動場面」において、以下の学習活動を工夫した。

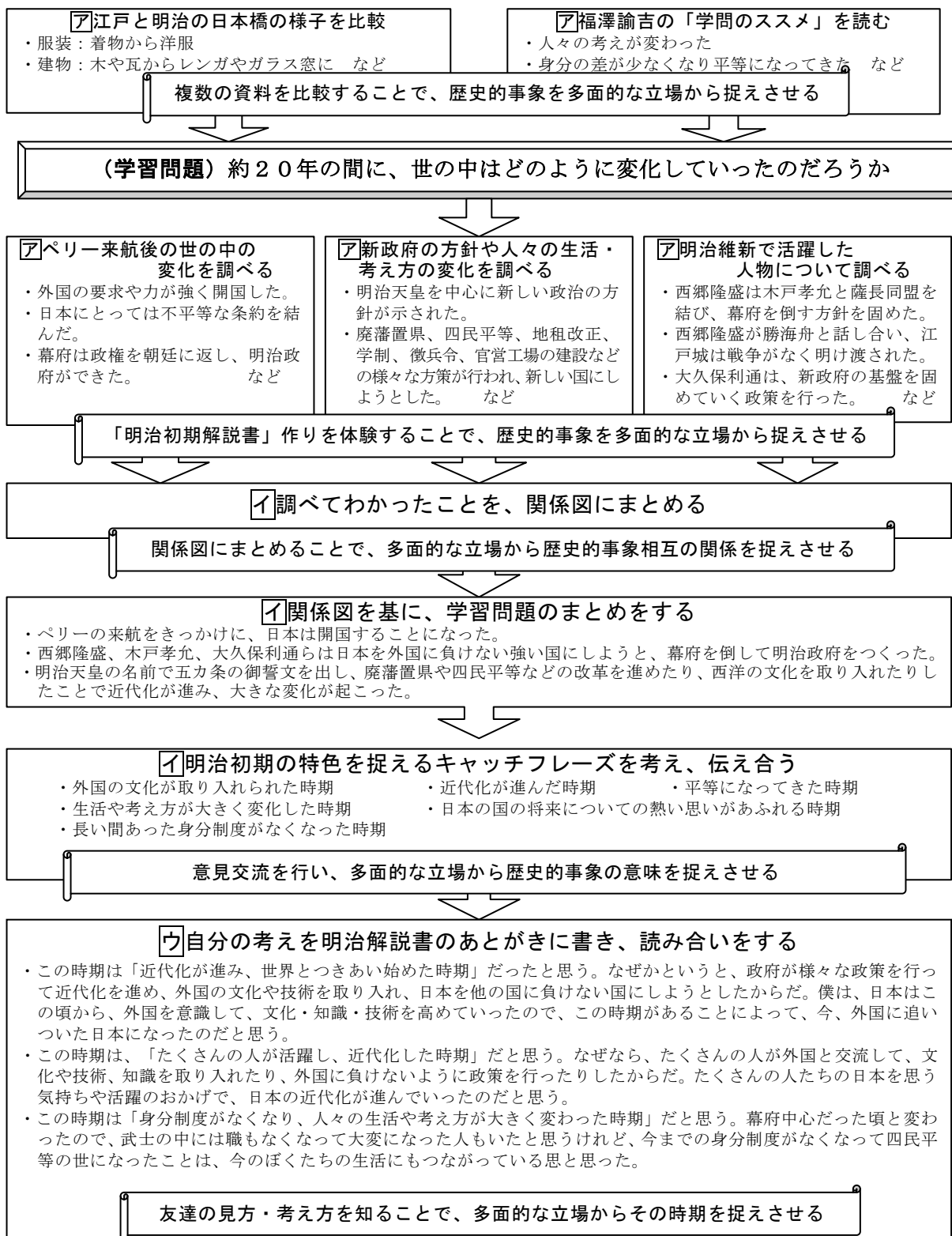


5 実践事例 「明治維新をつくりあげた人々」


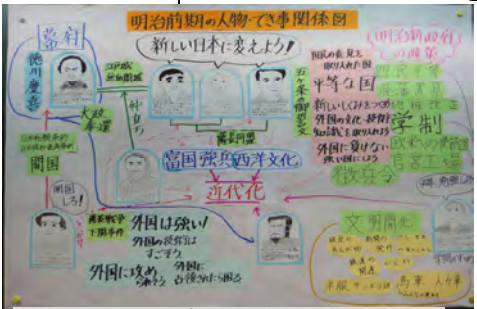
(1) 小単元の目標

- ・黒船来航、明治維新、文明開化などについて調べ、我が国が欧米の文化を取り入れつつ諸改革を行い近代化を進めたことや、我が国の近代化に貢献した先人の働きや思いが分かる。
- ・明治維新をつくりあげた人々の業績が、我が国の国家・社会の発展に果たした役割を考えることができる。

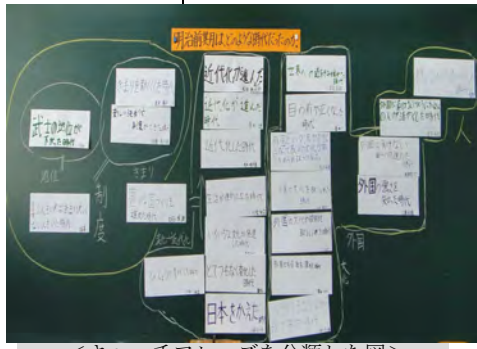
(2) 小単元のイメージ図 ※ア～ウは指導の段階



(3) 小単元の指導計画 (全9時間)

ねらい	○学習活動 <指導段階>	●学習活動の工夫 ・期待する児童の反応	★資料
① 2枚の絵や「学問のスメ」の一節から人々の生活や考え方が大きく変化したことを読み取る。	○江戸時代後期と明治維新後の日本橋の様子を比較しながら、様々な変化を読み取る。 <ア歴史的事象を知る> ○福澤諭吉の「学問のスメ」の一節を読み取り、江戸時代と明治時代の様子や考え方が大きく変わった原因について話し合う。 <ア歴史的事象を知る>	●比較して考える活動【多面的な立場から捉える】 江戸時代後期と明治維新後の日本橋の絵を、服装・乗り物・建物などに注目させて比較し、20年間で大きな変化があったことをつかませる。 ・服装は着物から洋服に建物は木や瓦を使った建物からレンガやガラス窓のついた大きな建物に変わっているので、外国の文化が入ってきたのではないか。 ・乗り物は馬・駕籠から馬車・人力車に変わっているので、技術が進歩したようだ。 ・馬車に多くの人が乗っている。女の人の姿も見られるので、身分差が少なくなって平等になってきた感じがする。	★アンペール 幕末日本絵図 ★東京名所 留賀町三ツ井店両側 富嶽眺之図 ★「学問のスメ」 ★福澤諭吉肖像画
② 明治初期の出来事や明治の新しい世の中を作った人々について調べ、学習問題をつくる。	○明治初期の年表とこの時代の人々の写真を見て、新しい国づくりをするために様々なことがあり、多くの人に関わっていることを知る。 <ア歴史的事象を知る> ○学習問題をつくる。 <ア歴史的事象を知る>	 <p><2枚の日本橋の絵></p>	★明治初期の年表 ★ペリー・西郷隆盛・大久保利通・木戸孝允の肖像画
「約20年の間に、世の中はどのように変化していったのだろうか」			
③ 生活や考え方の背後にある社会の変化に気づき、江戸から明治に変わったことが分かる。	○ペリー来航の様子を読み取り、開国や大政奉還など、ペリー来航後の世の中の変化について調べ、『明治初期解説書』にまとめる。 <ア歴史的事象を知る>	●体験的な活動【多面的な立場から捉える】 調べたことはワークシートにまとめ、それらを『明治初期解説書』として本の形に綴じることで、児童の意欲を喚起する。また、出てきた事象や人物の業績をキーワードでまとめておき、まとめや関係図、キャッチフレーズ作りに活用する。 <u>ペリー来航後の世の中の変化</u> ・外国の要求や力が強くて開国をした。 ・日本にとっては不平等な条約を結んだ。 ・幕府は政権を朝廷に返し、明治政府ができた。	★米船渡来旧諸藩土固之図 ★米国大統領からの手紙 ★日米和親・日米修好通商条約文
④ 明治政府が廃藩置県や四民平等などの諸改革を行い、それに伴う人々の生活や考え方が変化したことが分かる。	○新政府の方針に伴う人々の生活や考え方の変化について調べ、『明治初期解説書』にまとめる。 <ア歴史的事象を知る>	<u>新政府の方針や人々の生活・考え方の変化</u> ・明治天皇を中心に新しい政治の方針が示された。 ・廃藩置県・四民平等・地租改正・学制・徴兵令・官営工場建設などの様々な方策が行われた。 ・四民平等などの方針を受けて、武士や農民の身分差がなくなった。 ・人々の生活や考え方は江戸時代から大きく変わった。	★五箇条の御誓文 ★使節団の出發 ★明治初期の日本橋付近の絵
⑤⑥ 各種の資料から、明治維新の改革や活躍した人物の業績について調べ観点に沿ってまとめる。	○明治維新で活躍した人物を調べ『明治初期解説書』にまとめる。 ○調べた人物について、グループで情報交換する。 <ア歴史的事象を知る>	<u>明治維新で活躍した人物について</u> ・西郷隆盛は木戸孝允と薩長同盟を結び、幕府を倒す方針を固めた。 ・西郷隆盛が勝海舟と話し合い、江戸城は戦争がなく明け渡された。 ・大久保利通は、新政府の基盤を固めていく政策を行った。	★西郷・大久保・木戸・勝・徳川慶喜・ペリー・明治天皇・福澤諭吉・伊藤博文肖像画
⑦ 調べた人物や事象を整理して関係図を作る。	○今までに学習したことをもとに関係図をつくる。 <イ歴史的事象相互の関係や歴史的事象の意味を捉える>	●関係図にまとめる活動【多面的な立場から捉える】 『明治初期解説書』とキーワードを活用しながら、歴史的事象相互の関係を捉えるために各自で関係図を作成する。 ・ペリーが来たことで開国し、近代化のきっかけになった。 ・五箇条の御誓文の内容が、政策とつながっていた。 ・文明開化で西洋の文化が取り入れられて大きく変化した。 ・西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允たちが中心となって、世界に通用する強い日本を作ろうとした。	★明治初期解説書 ★キーワードカード
 <p><作成した関係図></p>			

<p>⑧学習問題に対する答えをまとめる。</p>	<p>○関係図を基に、学習問題のまとめをする。 <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的象相互の関係や歴史的象の意味を捉える></p> <p>○学習したことを振り返り、明治初期のキャッチフレーズをつくる。 <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的象相互の関係や歴史的象の意味を捉える></p>	<p>●文章で表現する活動 歴史的象相互の関係をまとめるために、作成した関係図から分かったことを書く。 ・ペリーの来航をきっかけに日本は開国することになった。 ・西郷隆盛、木戸孝允、大久保利通らは日本を外国に負けない強い国にしようと、江戸幕府を倒して明治政府をつくった。 ・明治天皇の名前で五カ条の御誓文を出し、廃藩置県や四民平等などの改革を進めたり、西洋の文化を取り入れたことで近代化が進み、大きな変化が起こった。</p> <p>●文章で表現する活動 歴史的象の意味を捉えるために、明治初期のキャッチフレーズとその根拠を考える。 ・外国の文化が取り入れられた時期 ・近代化が進んだ時期 ・平等になってきた時期 ・生活や考え方が大きく変化した時期 ・日本の国の将来についての熱い思いがあふれる時期 ・長い間あった身分制度がなくなった時期</p>	<p>★明治初期解説書 ★関係図</p>
<p>⑨明治初期に対する自分なりの見方・考え方を表現する。</p>	<p>○明治初期のキャッチフレーズとその根拠を伝え合う。 <input checked="" type="checkbox"/> 歴史的象相互の関係や歴史的象の意味を捉える> <input checked="" type="checkbox"/> 自分なりの見方・考え方を表現する></p> <p>○発表されたキャッチフレーズを参考にして、明治初期に対する自分なりの見方・考え方を『明治解説書』のあとがきを書く。 <input checked="" type="checkbox"/> 自分なりの見方・考え方を表現する></p>	<p>●効果的な交流活動【多面的な立場から捉える】 児童の自分なりの見方・考え方を表現する意欲を高めたり、考えたキャッチフレーズに対する価値付けをするために、キャッチフレーズとその根拠を伝え合う場を設ける。 ・外国の文化が入ってきたから生活が変わったと思っていたが、四民平等になったことで人々の生活が変化したというのは、確かにその通りだと思った。</p> <p>●文章で表現する活動 江戸末期から明治初期までの時期について自分なりの見方・考え方を、根拠を明らかにしながら『明治初期解説書』のあとがきとして書く。 ・この時期は「近代化が進み、世界とつきあい始めた時期」だったと思う。なぜかという、政府が様々な政策を行って近代化を進め、外国の文化や技術を取り入れ、日本を他の国に負けない国にしようとしたからだ。僕は、日本はこの頃から、外国を意識して、文化・知識・技術を高めていったので、この時期があることによって、今、外国に追いついた日本になったのだと思う。 ・この時期は、「たくさんの人が活躍し、近代化した時期」だと思う。なぜなら、たくさんの人が外国と交流して、文化や技術、知識を取り入れたり、外国に負けないように政策を行ったりしたからだ。たくさんの人たちの日本を思う気持ちや活躍のおかげで、日本の近代化が進んでいったのだと思う。 ・この時期は「身分制度がなくなり、人々の生活や考え方が大きく変わった時期」だと思う。幕府中心だった頃と変わったので、武士の中には職もなくなって大変になった人もいたと思うけれど、今までの身分制度がなくなって四民平等の世になったことは、今のぼくたちの生活にもつながっている思と思った。</p> <p>●効果的な交流活動【多面的な立場から捉える】 児童の捉えた、自分なりの見方・考え方に対する価値付けをするために、『明治初期解説書』のあとがきを読み合い、コメントを書く場を設定する。 ・外国との交流が盛んになった時期だと考えていたが、友達の話聞いて、西洋文化が取り入れられたことで近代化が進み、今の世の中につながる仕組みができて、今の世の中に近づいていき、今の生活があるのだと思った。</p>	<p>★明治初期解説書 ★関係図 ★キャッチフレーズ</p>



<キャッチフレーズを分類した図>

6 成果と課題

(1) 研究の成果

ア 観点を明確にして二つの資料を比べる、既習事項と比べるといった活動は、児童に多面的な立場から歴史的事象の意味を捉えさせ、自分なりの見方・考え方をもちこたせることにつながった。また、歴史的事象を背景、出来事、人物などの様々な観点から調べさせ事実を理解させたことで、学級のほぼ全員の児童が、調べたことを関連させて自分の力で関係図を作れるようになった。

イ 各小単元で関係図を作る活動を積み重ねたことで、人物や事象のつながりを考え、矢印の意味を記述（説明）できる児童が学級の8割程度まで増えた。

ウ 各自が調べたことやその時期の様子や特色を表す言葉を表現したキャッチフレーズと、その根拠を伝え合う活動を取り入れたことで、一人



＜矢印に意味の入った関係図＞

では調べきれなかった事実を捉えたり、自分にはなかった見方・考え方に気付いたりすることができ、約9割の児童が伝え合う前と比べ、より多面的な立場から捉え、自分の見方や考え方を深めたり、広げたりすることができるようになった。

児童の反応例 (伝え合いの前)	(伝え合いの後)
いろいろなつながりができた時期	→ 外国や人とのつながりができ、近代化が進んだ時期
近代化した時期	→ たくさんの人が活躍し、近代化が進み、大きな変化を遂げた時期

エ キャッチフレーズを作り、さらにワークシート集(解説書)のあとがきとして意見文を書かせたことで、自分なりの見方・考え方を次の観点から具体的に表現できる児童が増えた。

○現在の生活とつなげて考える。

○前の学習内容と比べて考える。

○人物に共感して考える。

○様々な立場から考える。

この時期は『急激な成長を遂げ、欧米に追いつく一歩となった時期』であったと僕は考えた。ペリーの来航がきっかけとなり日本は開国し、西洋の発達した文化や技術を取り入れ、日本が少しずつ欧米に追いついていったからである。岩倉使節団を欧米に派遣したが重要であったと思う。これがあったから、新たな日本の政治の道がひらけたと思う。僕はこの時期の変化や発展は、今の時代の土台となっていると思った。(児童の作品より)

(2) 研究の課題

多面的な立場から歴史的事象の意味を捉え、その時期に対する考えを児童一人一人に表現させたいと考え研究を進めてきた。しかし、児童が表現した自分なりの見方・考え方が、「我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てる」「よりよい社会の形成に参画する資質や能力の基礎を培う」という点において適切かどうか、指導や助言が必要なものもあった。これらの点は、中学校での各時代の特色を捉えていく歴史学習にも関わってくるので、成果のエで示した4観点以外からも児童の見方・考え方を育て、過去の出来事を現在及び将来の発展に生かそうと考えることができるような指導を継続していくことが大切である。

(3) 今後の方向性

各小単元の終末に自分なりの見方・考え方を表現する活動を積み重ねてきたことが、過去の出来事を現在及び将来の発展に生かして考える児童の育成につながっているか検証するため、歴史学習の内容ア～ケの学習を全て終えた後で、全体を振り返り、自分の考えを表現する授業を設定していく必要がある。

平成22年度 教育研究員名簿

小 学 校 ・ 社 会

【第4・5学年分科会】

地区	学 校 名	職名	氏名
港	芝小学校	主任教諭	須 川 美奈子
新 宿	四谷小学校	主任教諭	○北 中 啓 勝
文 京	誠之小学校	教 諭	岩 下 千 夏
板 橋	高島第三小学校	主任教諭	奥 山 健
小金井	南小学校	主幹教諭	◎横 山 明
多 摩	西落合小学校	主任教諭	奥 田 靖 子

【第6学年分科会】

地区	学 校 名	職名	氏名
中 央	日本橋小学校	教 諭	中 村 征 博
新 宿	鶴巻小学校	主任教諭	櫻 井 正 義
文 京	明化小学校	主任教諭	吉 羽 扶美子
大 田	田園調布小学校	主任教諭	○秋 田 博 昭
渋 谷	臨川小学校	教 諭	坪 池 学
府 中	府中第六小学校	主幹教諭	牛 山 聡

◎ 世話人 ○ 分科会世話人

〔担当〕 東京都多摩教育事務所指導課 統括指導主事 児玉 大祐

平成 22 年度
教育研究員研究報告書
小学校 社 会

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成 23 年度第 46 号〕

平成 23 年 6 月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課
所在地 東京都新宿区西新宿二丁目 8 番 1 号
電話番号 (03) 5320-6836
印刷会社 有限会社 シーダー企画
住 所 東京都新宿区西五軒町 7-10
電話番号 (03) 5228-3451